

## 雪おんな混沌譚

川端 俊英

木樵の巳之吉の家では、夜になっても藁細工の内職にいそがしかった。今年は十数年ぶりの大雪で、山での仕事が少なく、暇さえあれば藁靴や蓑を編んでいた。

囲炉裏ばたで藁をたばねている巳之吉のそばで、行灯を引きよせ、女房のお雪は針仕事をしていた。奥は衝立で仕切られ、十人の子供たちが眠っている。外は風が吹き、木のうなる音や、梢からしきりに雪の落ちる音がする。下を向いたまま、お雪が言った。

「今日は茂作爺さんの十三年目の命日だったね。鋸山の渡し小屋はどうだったの」  
巳之吉が答える。

「吹きっさらしで、寒いところだった。線香に火をとますのに苦労したよ」

巳之吉は、月の命日に茂作の墓に参り、毎年の命日には、茂作の死んだ場所に行つて線香を手向けていた。

巳之吉は茂作老人の下働きとして、青梅街道の氷川宿のはずれから、多摩川の渡しに乗り、対岸の鋸山へ入って仕事をしていた。巳之吉が十八歳、ちょうどその年も大雪で、命日のその日は吹雪になった。仕事がすんで渡し小屋へ戻って来たときにはすでに日がとっぷり暮れていた。舟もなく、向う岸の渡し守もいなくなっていたので、仕方なく小屋に泊った。中は一坪ほどの狭いところで、火を焚く場所もなく、わずかばかりの藁と、着ていた蓑とにくるまって横になった。風は、川の流れを巻き上げて、雪のつぶてとともに小屋の壁を叩きつける。小屋全体が木の葉のようにはためいてうなりを上げていた。そして真っ暗で怖かった。あとは何も記憶になかった。次の日の朝、氷のように固まって茂作が死んでいたことも、巳之吉もあやうく死ぬところだったことも憶えていない。巳之吉は渡し守に助け出され、それからしばらく寝こんだままになっていた。

「今日行ってみて、いつもの年なら菜の花の咲く川原が、全部雪なのを見て、びっくりした。あの年も、やはり同じように雪だった。あの日の怖かったことを思い出したよ」

「他に思い出したものはないのかい」

「何を」

「小屋に泊った夜のこと」

巳之吉は、「そうだなあ」と、しばらく考え、「今日も風がひどくて、ちょっと小屋の中で寒さをしのいだが、こんなところで一晩泊るのは無理だと思った」と言った。

「あの夜は、一晩中起きていたの?」

「ずっと寝ていたはずだ。疲れていたから」

「一度も目を覚まさないかい」

「真っ暗で、目を覚ましたのか、夢を見ていたのかわからない」

お雪は針仕事の手を止め、行灯に顔を寄せて火を消した。家じゅうが闇の中に沈む。

「暗いって、このくらい?」

「もつとだ。囲炉裏の火なんかなかったんだから」

「どんな夢を見たの」

「女がおれに顔をくつつけてきて、耳もとでささやくのだ。何か恐ろしいことだった」

「それは夢ではなく、本当に女がそこにいたんじゃないのかい」

巳之吉は天井の暗い空間を見つめていた。闇の中に梁が赤く照らされている。

「そうだ、夢とは思えなかった」

「女は何と言ったの」

「もうひとり死んだが、おまえは助けよう、だが、このことを人に言うんじゃない。言え、おまえの命はない」

お雪は突然立ちあがり、大きな声で言った。

「思い出した、この人は思い出したよ」

そして両手を挙げると、髪留めを解いてばさりと髪を背中に垂らした。そのまま、しばらく放心したように立っていた。巳之吉は驚き、仰ぎ見ながら、

「どうしたんだ」

と言った。お雪は答えない。

やがて家の外が騒がしくなって、「巳之吉の家が大変だ」という声が近づいて来る。お雪は続ける。

「夢ではなかったのだよ。でも、夢のような話」

表戸がどんと叩かれた。

「巳之吉、どうした」

「何があったんだ」

近所の村人たちの声がする。つつかい棒ががらんと外れ、戸が勢いよく開き、四、五人が入ってきた。

「静かに」

とお雪が叫んだ。村人が見たものは、白い衣装を着て髪を振り乱したお雪の姿だった。巳之吉の上に覆いかぶさるようにして両手を広げている。それが、囲炉裏の火に浮き出て不気味だった。

「この男は、とうとう思い出した。十三年前、吹雪の小屋の中で、茂作といっしょに寝ていた夜のことを。あの晩、茂作を氷のようにしてやったのは、この私だ。こんなふうだね」

お雪は、巳之吉の顔に、ふうと息を吹きつけた。口から出る息が白い氷のようにきらきら光っていた。巳之吉は思わず「あっ」と後ろにのけぞった。

「わたしはあのとときの雪女。決して人には言わない約束をしていたのに、おまえはとうとう言ってしまった。こうして村の人にも知られたからには、おまえを八つ裂きにするところだが、それでは子供たちがかわいそうだ」

天井から雪の粉が舞い落ちてきた。それはたちまち量を増し、滝のように囲炉裏をおおい、灰かぐらが立つ。あたりが霧のように白くなった。

「子供を大事にしておくれ。子供たちがなげき苦しむようなことがあれば、そのときは容赦はしないよ」

お雪の声はか細くなり、舞いまわる雪とともに、天井に昇ってゆき、姿が消えた。見ている者たちは、呆然として、声を出すことを忘れていた。

やっぱり雪女だったのか、と木樵の間では評判になった。

「あんな美しい嫁が、木樵の家に来るわけがない。なるほど、雪女なら合点がいく」

「巳之吉にとりついていたらんだな」

女房が居なくなることは、木樵の家にはよくある話だった。しかし、巳之吉の場合、特別のこととして扱われた。男と駆け落ちしたのなら、女房の行った先が気になるものだが、お雪は雪のように消えたので、もうこの世にはいないという

ことになった。だれも行き先を詮索した者はない。

たちまち困ったのは、子供たちだ。食事や身の回りのことを全部自分たちでしなければならなくなった。そのことで援助の手をさしのべる家はなかった。雪女の子供たちがどんな生活をしてきたのかも知らないし、同情しようにも同情のしようがなかったのだ。

十一歳のサチを先頭に、十歳のウタ、九歳のハナが、見よう見まねで家の仕事をした。だが、いっこうに追いつかない。なにしろ、一歳のスエ、二歳のヒロ、三歳のチカラが、所かまわず糞尿をたれるので、その世話だけでも大変だった。小さな子は不安と空腹で、泣きわめいてばかりいた。八歳のキイチ、六歳のゴスケ、五歳のタマ、四歳のミノリには小さな子のお守りをさせた。

朝の粥は巳之吉が作ったが、夕食は子供たちが準備をした。雪はもう降ることはなく、春の兆しが見えてきた。それでも水はまだ冷たく、梢をわたる風も刺すようだ。子供たちの手はあかぎれがひどくなり、皮膚が切れて血だらけになっていた。

「おとう、おかあはどこへ行ったんだ」

と子供たちに聞かれても、巳之吉には答えようがない。

「風になって、どこかそのへんにいるよ」

淋しい顔をして、そんなふうにつぶやくしかなかった。

仕事から帰ってきた巳之吉は、きたなく汚れた家の中に入ると、仕事の疲れが倍になった。出来そこないの粥をすすり、黴臭いたくわんをかじっても、食べた気がしなかった。内職の藁打ちをすると、砵を持ち上げる腕がだるく、ときどき土間に落とした。氣力が衰えているのか、腹が減っているのかわからなかった。子供らは喧嘩をし、大声で叫び合う。巳之吉もときどき声を荒らげて子供を叱った。そのたびに「子供たちが嘆き苦しむようなことがあれば、容赦はしない」というお雪の言葉を思い出した。思い出しても、ただそれだけで、どうしようもなかった。

巳之吉のいる木樵の集落は、氷川から青梅街道を甲州方面へ二里ほどのぼったところに、十五軒ほどかたまっていた。街道沿いに大きな茅葺きの家が三軒あり、そこから山を登って、山道沿いに小さな木樵の家が十数軒あった。巳之吉の家は、いちばん上から二軒目で、街道から七町ほど離れている。

巳之吉の気の落ち込みは、はたから見てもよく分かった。集中できないのは危険

だからと、枝打ちや伐採の業務から外され、一人で粗朶を集める仕事に回された。氷川や青梅付近の山へ入る仕事はいい収入が得られるが、反対の甲斐側では、柴刈りや粗朶を集めるしかない。給金も安かった。

巳之吉は毎日、甲斐に向かって街道をのほり、丹波山の近くから雲取山へ入って仕事をした。ちょうど十三年前、茂作爺さんが死んで、相方もなくなり、一人で山へ入るようになったときの仕事場だ。

「また元にもどってしまった」

そう思うと、これまでの年月が、夢のように思えてきた。

陽が西に傾くところに、集めた粗朶の束を背中にしょって家路についていると、行商の人とすれ違ったり、前を行く御嶽参りの旅人を追い越したりした。巳之吉はいやでもお雪のことを思い出さずにはいられなかった。

あれはおれが十九の年だった。杉林の斜面は雪で真っ白く、多摩川の岩にも雪が載っていた。けれども、雪の解けたぬかるみ道の端には、ふきのとうが顔を見せていたりした。ふと前を見ると、かよわそうな女が一人、笠もかぶらぬ旅姿で、とぼとぼ歩いている。なぜだか追い越して先へ行く気になれず、歩調をあわせて三間ほど後ろを歩いていた。女がふと振り返り、こちらを見た。

そのときだ。おれはこのひとが来るのを十九年間待っていた、そんな気がしたのだ。ここで会うために生まれ、ここに住み、ここで仕事をしていた。うつつの感じがなくなり、夢の中のような気分になってきた。気がつくとき、おれはじっと立ち止まって女を見ていた。

「一人旅なので、この山道は心細うございます」

女はそんなことを言った。その声は、三間離れている耳にもはっきり聞こえた。おれは近づいて行って、いっしょに歩きはじめた。なんだか他人のような気がしなかった。そして女が、「木樵の巳之吉さんの家はどこですか」と訪ねるような気がした。そこでおれは言った。

「ええと、あんた誰だったかな」

「ゆき」と女が答えた。

「おとうの葬式に来た人？　――じゃ、茂作爺さんの葬式？　――じゃ、何で来た

の



おれの質問に、お雪は体をよじりながら笑い出した。その気さくな明るさがまたおれの気に入った。お雪が旅をしていたのは、両親が亡くなり、身寄りもないので江戸へ出て働こうと思ったからだという。けれどもおれは少しも失望しなかった。それなら急いで行くことはない。おれの家へ来て世間話を聞かせてくれ。そんなことを言った。

「こんなつまらないわたしの話でもよかったら、お母様に聞かせてあげましょう」お雪がそう言ったとき、おれはもう有頂天になり、山がいつぺんに春を迎えたような気がした。

お雪はおれの家に来て、おかあの手伝いをするうち、そのまま居ついてしまった。そしておれの女房になった。おかあも大喜びだった。五年後に死んでしまったけれども、かわいい孫にも恵まれ、嫁の心づくしを感謝して、あの世へ旅立った。そのあと何年間も、おれたち家族は幸せだった。

巳之吉は、そんなことを思い出しながら歩いた。目の前に、美しかったお雪の顔が何度も浮かんだ。

家に帰ってしばらくすると、木樵の元締がやってきた。元締は五十代の小柄な男で、十五軒の仕事を取りしきっている。山の仕事だけでなく、製材業務や、藁細工の内職まで手配していた。

元締は上り框に腰をおろして言った。

「ずいぶん困っているようだな」

巳之吉は畏まって坐り、「へえ」と頭に手をやった。

「後添いをもらったらどうだい」

「いいえ、そんな」と、巳之吉はてのひらを突き出した。「お雪ほどよくしてくれた嫁はありませんし、それに、来てくれる人はありませんよ」

サチが背中にヒロをくくりつけた姿で、湯呑みを元締に差し出した。ただの白湯に過ぎなかったが、元締は受け取りながら、サチの手や、顔つきや、背中の子をちらりと見た。

「赤ん坊の乳はどうしてるんだい」

「長治郎さんのかみさんからもらい乳をしています。柔らかいものなら、もう食べるんですが、それじゃ足りないのです」

「十人も、どうやって食わせるんだ。このままじゃ、おめえも、子供たちも、共倒れだ。もらってくれるという人が、どこかにありゃあいいが。よかったら、世話をしてやってもいい」

「とんでもありません。八歳のキイチが十歳になって奉公に出るまで、ちゃんと家で育てます。それでなきゃ、今度は本当に八つ裂きですから」

元締は苦笑いをして、「困った魔性に魅入られたもんだ」と言ったあと、しばらく考えていた。

「近所のかみさんに頼んでみるか。ときどき面倒を見てもらえば、少しは違うだろう」

「それはありがたいです。わたしのほうからは、とても頼めませんので」

巳之吉の顔に明るさが見えた。

「そうだろう。おめえの家は、雪や雨を食って生きてるんだと、かみさん連中は思ってるぜ」

元締は愉快そうに笑い、帰っていった。

しかし、元締がいくら頼んでも、手伝いに来ようという女はいなかった。巳之吉の家は暗く沈み、子供たちは生気を失い、巳之吉は気鬱の病をわずらったようにぼんやりし始めた。

端午の節句が終わり、山はすっかり夏山になった。

巳之吉がいつものように山で仕事をしていると、雷が鳴って夕立がきた。木の下の雨宿りをするうち、雨は小やみになり、暗かった林に光がさしてきた。巳之吉は雲の流れの見える場所に出た。

そのとき、聞き覚えのある声があった。

「おまえさん、聞いておくれ」

巳之吉ははっと空を見上げた。声は上からだ。雨を顔に受けながら、「お雪」と呼んだ。

「おかみさんを貰っておくれ。子供たちにはまだ、女の親がいなくてはいけない」

「何を言う。雪女でもいいから、戻って来てくれ」

巳之吉は空を見上げ、梢を見上げながら、くるくる回った。

「おかみさんを貰っておくれ。氷川の丸山橋に乞食女がいる」

杉の木立を透かして光が入り、雨上がりの霧が煙っている。「丸山橋だよ」という声が遠ざかって行った。

次の日、元締に頼まれ、村の藁細工の製品を持って氷川にある問屋へ行った。問屋に荷を降ろし、帰りの藁束をもらって、背負子にかついで外に出た。

丸山橋まで来ると、橋のたもとの柳の下に、さっきは見えなかった女の乞食が坐っていた。巳之吉は、胸がふさがるようなやるせない気持になった。背負子を降ろして欄干に立てかけ、女の前にしゃがみこんで、

「おまえさん、飯を炊いたことがあるかね」

そう言いながら、手拭いで隠した顔をのぞいた。火事で焼け出されたのか、皮膚が焼けただれ、表情というものがなかった。細く開いた目も、見えているのかいななのか、ぼんやり地面に向けられている。髪が真っ白なので老婆だと思ったが、胸元からのぞく汚れた肌のきめは年寄りのようではない。

「家の仕事をしたことは？」

女は言われるたびに、ゆっくりうなづいた。

「おれといっしょに来てくれるかい。歩けるか」

乞食は杖にすがってよろよろと立ちあがった。村まで歩けそうもない。巳之吉は藁の束を降ろし、三つに分けてくくった。背負子に女を横坐りにすわらせ、落ちないように藁束といっしょに縄でしばった。その背負子を背負って、残りの藁束は両脇にかかえた。

巳之吉が村に向かって町筋を歩いていると、村の木樵仲間が声をかけた。

「おい巳之吉さん、酔狂はやめなよ。どうしてこんな者を」

「おれの家には女手が要るんだ」

「だが、何もこんな」

「ほかにあるか」

巳之吉は吐き捨てるように言って歩きつづけた。

町境を過ぎ、人家がなくなり、人の往来がまばらになった。

「おまえさん」

巳之吉の耳に声が聞こえた。山の中で聞いた声と同じだ。巳之吉は空を見上げ、泣くような悲しい気持で、

「おまえの言うとおり、新しい女房を連れて行く。これでいいんだな」



と呼びかけた。

「決して振り向いてはだめだよ。前を向いたまま、聞いておくれ」

その声は、背中の乞食が言っているのだ。巳之吉は思わず、「お、おゆ」と声を出そうとした。

「しっ。口をきいてはいけない。何もないような顔をして、耳だけかたむけておくれ。これには深い訳がある。今まで黙っていたことを許しておくれ」

巳之吉の胸に、何とも言えないうれしさが込み上げてきた。じっとしておれないような気がしたが、我慢して聞いた。

「おまえさんとはよくこんな話をしたね。わたしたちは生まれる前から結ばれていて、死んだあとでも同じはずの花に生まれるにちがいない。そんな気がするくらい仲のいい夫婦だったね。それはいまでも変わらないよ。」

でも、わたしには別の顔があった。わたしは、あるお家の指図を受けて秘密をさぐる間者、忍びの女だったのだよ。黙っていたのは、おまえさんや子供たちの生死に関わることだったから、仕方がなかった。

この冬、使命が終わったので帰還し、勤めの暇を願い出たけれど、受け入れられなかった。忍びを辞することは、死ぬことと同じなのです。二度と同じ姿でこの世に現われることはできない。それで、こんな姿になってしまったのだけれど、いまではもう忍びではない。けれど、お雪でもない

「おれたちは、見張られているのか？ 忍びに」

「いいえ、もう村を監視することはないよ。巳之吉の家にお雪が戻ってさえ来なければ、すべては終わっている」

「では、なぜ隠れようとするのだ」

「わたしがかつてお雪だったことを、村人に知られてはいけないんだよ。お雪はもう、この世にいてはいけない」

巳之吉の胸に喜びの激情が走った。そんなことくらいなら、何でもない。秘密は必ず守ってみせる。それにしても、また会えると思ってもみなかった女房に、ここで会って、背中に背負っているだけなんて、我慢がならねえ。巳之吉はそう思った。そして後ろを振り返り、また前を見、急ぎ足で歩き出した。川にそって曲がりくねった街道を行き、何度目かの鼻を曲がって二町ほど歩いたとき、

「うしろに人はいねえか」

巳之吉はお雪に聞き、自分でも振り返って見た。前後に人がないのを確かめて、いきなり藪にざぶざぶ入った。体が隠れるくらい深い笹の中に分け入り、背負子をおろし、お雪をおろした。そして抱き合った。

「どんなに会いたかったか」巳之吉はお雪の焼けただれた顔に何度も唇を当てた。「つらかったろうなあ。苦しかったろうなあ」

お雪も力いっぱい巳之吉に抱きついたが、顔は背けるように、上を向いたり横を向いたりした。

「つらくはないよ。おまえさんや、子供たちのところへ戻って行けるなら、どんなことも、つらくはないよ」

巳之吉はお雪が首をそむくたび、こちらに向け、口を吸い、顔を舐めた。

「おれは、おまえが雪女でもよかったし、今のままでもいい。おまえが、おまえならしい。おれたちは、体は二つだが、心は一つなのだ」

「だがおまえさん、わたしが帰ってきたことを村の人に知られないように気をつけなければいけないよ。人の噂は千里を飛ぶからね」

ふたりはそれから半刻ほど藪に入っていた。

十三年前の冬、お雪は氷川の愛宕山を見張るように指令をうけた。吹雪の吹きまくる夜どおし、仲間三人と、山の頂にある愛宕神社を監視していた。真夜中になって黒装束の五人が集まってきた。一団は境内の一角にある小さな祠の裏から箱を掘り出し、氷川の方へ降りて行った。他の二人が黒装束のあとをつけて行き、お雪は居残って、さらに周辺を見回ることになった。

やがてお雪は、鋸山の渡し小屋の中に倒れている二人を見つけた。小屋の中は真つ暗で夜目がきかなかつたが、手探りで、一人は老人らしく、もう一人は若い男であることがわかった。老人は、体全体が氷になって固まり、すでに息絶えている。若者は、これも同じように衣類や髪が凍っていたが、まだかすかに息があった。お雪は男の衣類を剥がし、蓑や藁束といっしょに抱き締めて暖めた。明け方近く息を吹き返したようなので、衣類を着せてやりながら言った。「もう一人は死んでしまつたが、おまえだけは生かしてやったよ。できるだけ早く人が助けに来るようにするから、辛抱しておいで。だけど、わたしに助けられたことは、だれにも言うんじゃないよ。言えば、おまえの命にかかわるのだからね」そう言ってその場をはなれた。

そのあと、氷川の宿まで出て、「鋸山の渡しで人が死にかかっている」と大声で触れ回った。

その一年後に、お雪が巳之吉に接触することになったのは、死んだ茂作が、甲斐の埋蔵黄金についての情報をつかんでいたことが分ったからだ。愛宕神社で掘り出された箱は黄金の一部で、他にどこに隠されているのかがわからない。また、茂作の情報が誰に伝えられているのかも不明だった。お雪は巳之吉に近づき、女房になることを命じられた。

「だけどわたしは、茂作爺さんのことをなんにも知らされていなかったし、あのとき助けた若者がおまえさんだってことも知らなかった。下っ端の忍びは、全体のことは知らないものだよ。わたしがおまえさんと夫婦になれたら、次の指令が来ることになっていった。

だから、旅人のなりをしておまえさんに出会ったときは、まったく見ず知らずの男と女が出会ったのも同じだった。そして、おまえさんを見たたん、わたしは自分が忍びの女だということを忘れてしまった。

わたしはおまえさんを見ながら、なつかしい風景を見るような気がしていた。どこか遠い昔に見た美しい風景を、思いだそうとして思い出せない。それを思いだせば、幸福が胸いっぱい広がるような気がする。けれどこの気持は、あとで何度も話したことだね。わたしが忍びの女でなく、百姓の娘や武家の娘だったとしても、二人は必ずここで出会うことになっていた、今でもそう思うよ。

三月後に使いが来て、埋蔵金の秘密をさぐるように指令を受けた。それから、その後の一年間に、使いは二度来た。わたしは、おまえさんが何の情報も持っていないことを伝えた。村の中にも、埋蔵金に興味を持っている人など、一人もいなかった。それで、すぐに使命は終わると思っていた。

ところが、使いはそれぎり、十年以上も来なかった。わたしは、このまま何事もなく暮らせたらどんなにいいと思ったか。何かの事情でお家がつぶれ、忍びの棟梁も仲間もみんな滅んでしまった。そう思いたかった」

お雪の話は、そんなふうが続いた。お雪が忍びの家に帰還して分ったことだが、主家のあるじは十年の蟄居を申しつけられ、秘密の指令はいつさい凍結していたのだ。十二年も経ったのち、お雪は、「直ちに帰参すべし」との命令を受けた。雪女

に化けて消える狂言も、上の指示により、仲間の助けを借りて仕組まれたのだ。

巳之吉とお雪は今後のことを相談し合った。村人には、手伝いの女が来たことにしておき、しばらくして女房になる。声は偽れないので、お雪は声を出さない。子供たちには、すぐに真実を伝えないが、成長に応じて少しずつ教えていく。そんなことを話した。

藁を出て、村まで帰った。元締の家に立ち寄り、藁の束を降ろした。元締は女を見て、あきれたような蔑むような顔をした。

「どうしてこんなものを連れてきたんだ」

「今日からうちの飯炊き女になってもらう」

「何も、こんな」

お雪は納屋の外の地面に物乞いをするような恰好で坐っていた。元締は近づいて、「どこから来なすった」と問うた。

「火事でやられて、声が出ません」

巳之吉は簡単にそう言い、そそくさと藁束を片づけてしまった。自分の家の藁だけを束にして、お雪に持たせ、また背負子に乗せて山道を登って行った。

家に帰ると、外で遊んでいた子供たちが遠巻きに見て不安そうな顔をした。巳之吉は言った。

「この人には、前のおかあと同じことをしてもらうが、前のおかあではない。あたらしいおかあだ」

家に入り、巳之吉が女のほおかぶりを取ったとき、子供たちの何人かが、小さな驚きの声をあげ、子供どうしで体を寄せ合った。三歳と四歳の子は、もうすこしでべそをかくところだった。巳之吉は、家の中で身体を拭いてやり、お雪の着物を着せた。

母親の着物を着ていても、子供にとっては見知らぬ女だった。夕飯の支度をはじめた女を、緊張して見ていた。女が動くたび、子供たちの顔と目がつられて動いた。鍋の中で、食べ物がぐつぐつ煮えはじめた。うまそうな匂いがする。サチにおんぶされていたスエが目をさまし、泣きはじめた。サチは坐ったまま体をふってあやしたが泣きやまない。その叫ぶような泣声は、人の心を暗い予感におのかせた。家じゅうが不幸に呑みこまれていくように思われる。

女がサチに近づいてきた。手をのばし、赤ん坊を抱くようなしぐさをする。サチ

はその顔におびえながらも、おおい紐をといて、スエを託した。赤児は女に抱かれながら、なお激しく泣いていた。女は囲炉裏ばたにすわり、乳をふくませた。赤児の泣き声がびたりとやんだ。

鍋の音だけの静寂が戻って来た。不思議なやすらぎがひろがる。一番安心したのはサチだ。もう、もらい乳をしに村まで降りなくてもいいんだと思った。

粥には、芋と干し魚の身が刻まれて入っていた。なつかしい匂いだった。ふうふう吹きながら、一口、二口食べた。「うめえなあ」「うん、うめえ」子供たちの口から、喜びの声が上がった。すると、突然、サチとキイチが声を放って泣きはじめた。ハナも、「うめえ、うめえ」と言いながら、泣いている。いきなりサチは椀と箸を放りだし、女に走り寄って抱きついた。

「おかあの味だ。やっぱりおかあだ」

顔を女の胸に押しあて、あかぎれだらけの手で、着物をつかんだ。それを見て、ウタもハナもキイチも走り寄って、女にすがりついた。

「おかあ」

女はかぶりをふって否定した。巳之吉は、一歳のスエを膝に乗せ、粥を食べさせていたが、それを見て体が震えだした。どう声を掛けたらいいのか分らなかつた。

「おかあ」

女はまたかぶりをふった。あまり強くかぶりをふったので、目から出る涙が子供たちにふりかかった。

(了)